

## アメリカにおけるレーニン主義の組織と集団

矢 澤 修 次 郎

はじめに

本稿は、筆者が年来探究している「ニューヨーク知識人」研究の一貫をなすものである。<sup>(1)</sup>いくつかの論稿で明らかにしたように、「ニューヨーク知識人」たちの基本問題の一つは、様々な社会主義運動がどうしてアメリカにおいて失敗に帰してしまっただのかを考察することであった。「ニューヨーク知識人」に分類される知識人は、共産党とは対立関係にあった諸社会主義運動にコミットした経験を持つものが多く、そうした運動団体と彼らの思想との関係を考察することが、この研究の重要な柱の一つになることは言うまでもない。しかしまた、彼らは対立関係にあった共産党をどのようなものとして把握し、

どのように批判したのかを理解しておくことも、先の課題に劣らず重要な課題と考えられよう。事実、「ニューヨーク知識人」に数え上げられるN・グレーザー、L・コーザー、P・セルズニックなどが共産党を分析し批判する作業をおこなっており、自分達の運動から共産党より豊かな社会科学の成果を生み出したと主張している。本稿は、P・セルズニックの共産主義運動の組織論的分析を紹介・検討することを目的としている。セルズニックは、若くしてスターリン主義を克服するものとしてトロツキー主義に共鳴し、アメリカトロツキスト運動の青年組織ならびに社会主義労働者党(SWP)に参加した。しかし一九四〇年に起こったトロツキスト運動の分裂に際しては少数派の労働者党(WP)を選択し、労働

者党内部においては右派のリーダーとして活躍したが、やがて徴兵され、その時期はいつのことかはっきりしないものの、究極的には社会党に戻っていった、という政治的経歴を持った人物である。<sup>3)</sup>同時に彼は、戦後コロンビア大学の大学院でマートンの指導のもとに社会学、とりわけ組織論を研究し、『TVAと草の根』(一九四九年)や『組織的武器』(一九五二年)などによって、組織論、リーダーシップ論の指導的研究者として活躍した。本稿は、その『組織的武器』を主要な検討素材とするものである。

改めて言うまでもなく、運動組織を外部から分析するには諸々の困難がつきまとう。ましてや一定の運動をそれに敵対するものが分析するということには、いやまず難点が浮かびあがってくることは避けられない。したがって、本論文で紹介・検討されている内容は、その真偽を問うという視角からおこなわれたのではなくて、あくまでも先のような思想・運動経歴を持った人物の視点からするアメリカレーニン主義の分析・検討であるということを予めお断りしておきたい。いふならば、ニューヨーク知識人としてのセルズニックが、アメリカレーニ

ン主義の組織と集団をどのように分析したかを明らかにし、そうした分析・検討の意図するところがどこにあるかを確定するのが、本論文のささやかな狙いなのである。

### 1 分析の視角と対象

セルズニックは、『組織的武器』のフリープレス版(一九六〇年)に付した序文において、アメリカレーニン主義の組織論的分析の方法について言及している。彼によれば、組織化された集団という意味での制度をいかに評価するか、理論、制度分析の論理を明確にするのがこの著書の主題なのだが、そのためにはその制度の深層を読み取る「解釈のための論理」が是非とも必要になる。なによりもまず、われわれは制度を一つのシステムと捉えなければならぬ。そして、そのシステムの「一定の概念的に規定された特徴」を探し出さなければならない。勿論その場合には、さまざまな徴候、サイン、インディケーターなどに着目して、「潜在的なパターン」「潜在的な構造」を探り当てなければならぬのであって、言うなれば「制度的システムの単純化されたモデル」「潜在的なパターンのモデル」<sup>4)</sup>を作ることが肝要である。たと

えば、共産党のメンバーシップ、リーダーシップ、他の集団にたいする態度といった表面的な特徴をいくら問題にしたところで、共産党を判断する根拠を得たことにはならない。組織的な戦略、戦術を含む特徴的な組織特性に特別な注意を払ってはいじめて、その制度を評価する真の手掛かりが得られるというのである。その上で、そのシステムが構築され、維持される方法、そのシステムに内在的な緊張、さらにはそのシステムが実際に行爲している姿を把握することによって、そのモデルは豊富化されていくのである。

セルズニックは、共産党の組織特性を「組織的武器」と呼ぶ。「組織的武器」とは、なにごとかを達成しようとする時に、組織が有効な働きをするといった一般的な意味合いで使われているのではない。彼の定義を聞こう。「われわれは、組織および組織の実践が、権力を追求するエリートによって、その競争がおこなわれる領域のコンステイテューショナルな秩序による制約を受けないような仕方です使われる場合に、それを組織的武器と呼ぶ。」「組織的武器」とは、ノーマルな文脈からは切り離された、一定のコミュニティにおいては正当な行爲様式とは認め

られないような組織的実践のことをいう。<sup>(5)</sup>この定義から明らかのように、組織的武器とは、コンステイテューショナルな秩序によって正当と認められないような組織ならびに組織的実践のことである。問題は、組織とコンステイテューショナルな秩序との関係にある。一般的には、コンステイテューショナルな秩序というのは、いろいろなエージェンシーの組織のされかた、それぞれのエージェンシーにどのような権力が与えられるか、どのような仕方でのその権力が行使されるかなどを規定するものである。それに従いその秩序を破壊することなく実践がおこなわれるのか、その制約を出てその秩序とはかかわりなく実践がおこなわれるかが、問題にされている。セルズニックは、後者の場合を「組織的武器」と命名し、それを考察の対象にしたのであった。

もっとも、このコンステイテューショナルな秩序の内か外かという基準には、よくよく考察を巡らせてみると、実にいろいろな問題があることが判る。しかし、セルズニックはこの点についての詳しい考察をおこなうことなく、その基準を所与の前提として議論を進めているので、ここではこれ以上突っ込んだ議論をしないで先に進むこ

とにしよう。ただし、彼の議論の前提には、「普通の市民であっても、任意集団を通じて、共同体や国家におけるより一層多くの権力を獲得することができる」というポランタリーアソシエーション主義があることだけは指摘しておいたほうが良いだろう。事実、セルズニックは、ポランタリーアソシエーションのメンバーをエージェンツに転換する過程を持つものがボルシェビキ党、組織的武器であり、したがって管理構造をもたざるをえないと言っている。ボルシェビキ党の側から言えば、いかにこのポランタリーアソシエーション主義を乗り越えるかが課題だということになるだろうし、確かにレーニンの課題は、まさしくここにあったと判断できるかもしれない。

## 2 組織的武器の特色

セルズニックも、組織の重要性を強調したことがレーニンの視点の中核を成していると判断し、「組織のポテンシャルを完全に使用することによって継続的に権力を掌握していく」<sup>(7)</sup>点にボルシェビキ党の特色を見出している。彼によれば、ボルシェビキ党はなによりもまず、カードルの党である。カードルは、専門的に訓練されたエ

リート集団の成員であり、組織と運動に献身的にコミットし、組織の恒常的な中核を構成して、日々めまぐるしく動いていく運動にたいしてリーダーシップを提供する。このようなカードルの形成は、「ポランタリーアソシエーション」を操作可能な手段に転化するための主要な条件である。党員がカードルになると、彼はもはや単なる党員ではなくて、組織とともに行動可能な組織の職員といった性格をもつようになり (deployable personnel)、党もポランタリーアソシエーションから一歩踏み出して、「管理的構造」(managerial structure)を備えるに至る。<sup>(8)</sup>

セルズニックは、ボルシェビキ党を党員という資源を最大限に動員するためのものであると考えている。ポランタリーアソシエーションのメンバーは、ほんの部分的にしかその組織に係わらず、それぞれのメンバーの同意に基づいて活動がおこなわれる。これに対してボルシェビキ党のカードルは、組織原則と活動のための規律に従い、その結果としてより包括的に組織に係わり、組織の効果をより一層高めていくのである。したがって、党組織は、その成員を行為へと動員し、彼らに規律を与え、彼らを操作するものと考えられなければならない。

セルズニックの言いたいことは、ボルシェビキ党においては、個人が「完全にコントロールされる」<sup>(9)</sup>ということであろう。彼は、そのコントロールは隔離と吸収とによって達成されていくと考える。隔離というのは、黨員にとって別個の道徳的、知的な世界を創造したり、支配的な道徳的、法的原理などから身を引き剥がさせることである。また吸収は、活動量、活動時間、さまざまな下位組織のネットワークへの係わりなどを増大させることを言う。これら両者があいまって、黨員の行為への動員が極大化されていき、彼らの党への「完全な包絡」<sup>(10)</sup>が完了する。すると、ボランタリーアソシエーションのリーダーたちが権力の座に止まりたい場合には絶えず一般的な労働者の同意を取りつけないならぬのに比して、党はリーダーシップにそのような制約を課すことなく、規律に従って「操作可能な手段」として機能することができるようになる。まさしくここに、党は単なる政治的組織ではなくて、管理的な側面をも持っているという点との根拠があるのではないか。そしてこの側面は、民主集中制、さまざまなカードル政策、分派や対抗プレスの禁止、などによってより一層強化されていく。その結果、

組織に民主的な要素を注入するはずの選挙でさえも、単なる管理上の工夫といった意味しか持たなくなってしまうのである。

さらにいろいろな分析を付け加えて、セルズニックはボルシェビキの基本的なコードを次のような一〇の項目に整理したのだ<sup>(11)</sup>。(1)ボルシェビキ党組織の目的は、訓練された参加者によって構成される、著しく操作可能な基幹組織を作ることである。(2)部分的な同意しか与えないような黨員は、完全な順応を要求できるようなエージェントにへと転換されるべきである。(3)党は、活動と教化を通じて、その成員を外界から隔離するとともに、運動への全体的なコミットメントを可能にする。(4)分断的で、行為を鈍らせるような民主的な参加を避けるために、ボルシェビズムは党内における政治的な論争を最小限度におさえることを要求する。(5)党組織の基調は、動員と操作である。(6)モラルを作り出すために、マルクス主義のイデオロギーのポテンシャルが充分に使われるべきであるが、同時に教義が戦術的な状況の要請に弁証法的に適応していくことも望まれる。(7)党は、解体と孤立という二つの危険にたいする砦であるべきである。(8)

党組織は、あらゆる可能な領域における絶えざる権力を求めての闘争によってのみ、維持することができるものである。(9)目標の集団を党組織に従属させるために、党をあらゆる活動を繰りひろげていく。(10)党は、公的活動とそれを助長するその他の活動を結びつけて展開して行く。

### 3 理論と実践

ところで、前衛と大衆というきわめて重要な論点について考察をめぐらす前に、理論と実践というこれまた重要な問題に言及しておくのが便利であろう。一般的に言っても、党の活動は共同体の提供する一般的な教育に頼ることはできないのであるから、党は独自の理論によって、その成員を作り上げていくことが是非とも必要になる。セルズニックによれば第一に、理論は政策の基盤として重要である。そして第二に、理論は行動の指針として不可欠である。後者の場合、理論はレーニンによって組織問題にまで適用され、今日にいたるまで人々の行動を律しつづけている。それだけではない。第三に、理論は管理機能、モラル形成機能をも果たしていく。なぜ

ならば、理論はそれを持つ者に、ビジョンの明晰性、仕事の確実性、勝利への信念などを与えてくれるからである。<sup>(12)</sup>セルズニックは、思考のカテゴリーを与え効果的なコミュニケーションを保証してモラルを高揚させたのはマルクス主義であるが、政治・組織教義を確立したのはレーニンであると考え、マルクス主義が極めて多様な視角から討論の俎上に乗せられているのたいして、組織教義としてのレーニン主義はそれほど多様な解釈に付せられることがない指摘している。そして、あらゆる教義を権力掌握のための闘争に従属させていくことを徹底させていくこと<sup>(13)</sup>によって、スターリン主義が成立したと判断している。

### 4 前衛と大衆

さて、ボルシェビキ党の構成が前衛を確立する試みであるとすれば、彼らは権力へ至る道を探求する途上で、当然、大衆との関係を模索することにならざるをえない。セルズニックによれば、ボルシェビキにおける大衆の概念は、権力を追求する人々の操作可能な環境を同定する一つの方法として位置づけられているものである。し

たがってそれは、権力を獲得するという目的との関係において、エリートの戦略、戦術に依じて、かつまた大衆の占める社会的、権力的な位置にしたがって、相対的、可塑的なものであると考えられる。したがって、ボルシエビキの用語においては、大衆の不可欠な特徴というのは、その操作可能性にあると言えよう。こうした特徴を持たないものは、大衆の部分を構成するものではない。

だとするならば、共産主義運動は以下のような諸層によって構成されていることが理解されるべきである。第一は、党内の自覚的なエージェントによって構成される中核部分。第二は、多くのイデオロギーに関わっている共産主義者。第三は、党大衆と呼ばれる層。第四は、党外の周辺のなターゲットになっている大衆。繰り返して言えば、大衆というのは、党の権力目標に依拠して、それに関わる限りで、大衆と呼ばれるものであって、それ以外のなものでもない。

以上のような大衆にたいして、ボルシエビキ党はさまざまな戦略を用いて接触を試みる。たとえば接触戦略を用いて、大衆を孤立の状態におかずに、周辺の集団を組織するなどして絶えず接触を保っていく。また中立化

戦略が用いられて、同じ社会集団にアピールするようなライバル組織を排除していくようにする。さらに正当性戦略が駆使されて、組織が行為の正当なる手段として受け入れられるように工夫が凝らされていく。そして最後に、動員戦略を使うことによって、大衆の参加の質が部分的な関わりから全体的なコミットメントへと変えられていくのである。

ここにおいてもセルズニックは、ボランティア・アソシエーションとボルシエビキ党とを対比して議論を進めている。彼によれば、多くのボランティア・アソシエーションは少数の中心メンバーによって運営されており、会費を払う会員が緩やかにその組織に結びついており、組織とその会員との間にはあまり緊密な相互関係が見当たらない。要するに、その組織の会員であるということの権力にとっての意味は、ごく限られたものであるにすぎない。彼はこうした状況というのは、共産主義者にとっては挑戦であり、よい機会であるという。それは、大衆参加の性格を変える政治的な可能性を秘めた状況であり、いろいろな戦略を用いることによって、権力獲得のためのエネルギー、資源として動員することが重要であ

(16)

またセルズニックは、動員戦略が使われる場合、誰を動員するのかによって動員のされかたが二つにわけられることにも注意を喚起している。すなわち、もしも前衛が適切な仕事に動員される場合には、教義としての共産主義によって説得され動員されるが、大衆が動員される場合は、大衆受けするスローガンを使って動員するというマヌーバーが用いられる。彼は、プロバガンダをも組織戦略に従属させるのがレーニン主義であったことに注意を喚起しているのである。(17)

## 5 大衆社会とレーニン主義

以上のようにセルズニックは、アメリカレーニン主義の組織とその戦略を批判的に検討してきたのであるが、ここで少し、その検討の意味するところや批判の文脈について考えておくことにしよう。彼は、スターリン主義を克服するものとしてトロツキー主義を評価し、その運動にコミットした。そして第二次世界大戦を帝国主義戦争と捉えそれを内乱へと転化しようとする立場を取り、労働者党に所属し、分派を黙認するトロツキー主義を突

践していく姿勢を示した。しかし圧倒的な現実是如何ともしがたく、やがてコンスティテューショナルな秩序の内側へと戻ってきた人物である。セルズニックは、本書を一九五二年に公刊している。当時アメリカは、共産主義世界にたいして「文化的冷戦」を展開していた最中であつた。少数のしかも殆ど影響力をもたない共産主義者しかいないアメリカにおいて、どうして徹底的な「文化的冷戦」が闘われなければならないのかといった批判も聞かれる中で、この「文化的冷戦」を担った知識人の論理は、恐らく次のようなものではなかつたか。すなわち、スターリン主義が主要な敵であり、それは東ヨーロッパを制圧するほどの勢いを持っており、しかもアメリカにもそれを受け入れる社会的土壌があるのではないか、だから、そのスターリン主義と徹底的に闘うことこそ、知識人の主要任務ではないか、というのがそれである。(18)セルズニックのレーニン主義の検討も、そうした文脈のなかに位置づけることができるように思われる。そのことは彼が、アメリカの制度がレーニン主義の侵食をうける可能性を「大衆社会」に求めているところに、如実に現れていないであらうか。

さて、セルズニックはまずはじめに、大衆社会を大衆と創造的なエリートの関係という視点から説明しようとした。彼はK・マンハイムに依拠しながら、社会の民主化の結果としての大衆の登場によって、文化の維持、発展のために必要不可欠な創造的エリートを支えていた社会構造が崩壊してしまい、そのエリートが本来の機能を果たしえなくなっている社会を大衆社会と考えている。民主化の結果、エリートの数も増加し、社会全体に深く影響を与えられるような集団は無くなってしまったし、観念や技術を成熟させるのに必要な日常的な圧力から自由でいられるといった特権さえエリートから奪われてしまった。大衆は、本来、エリートとの対比において「無資格なもの」と規定されているが、民主化の結果として、エリート達も「無資格なもの」になり、出来上がった大衆社会とは、無資格者が主権を握った社会以外のなにもでもない。<sup>(20)</sup>

次にセルズニックは、大衆という概念が「同質性」「無定型性」「未分化」といった特徴と結びつけられていることに着眼し、大衆というのは結局のところ、社会解体の産物なのだという視点から、大衆社会における社会

参加の質を問題にしている。彼によれば、大衆は伝統、人間関係、社会関係、社会構造から切り離された未分化で構造化されていない集合体を形成するものである。また彼らにあっては、「動機づけや禁止の基本的なパターン」といった意味での文化がほんの表面的にしか彼らを捉えてないということも注意しておくべきことである。社会にあって性格を規定する役割を担う制度―学校、教会、政治秩序―が社会の変動に適応することができないならば、当然のこととして、文化の衰退がおこってこざるをえないが、大衆社会は文化衰退をも現象せしめる社会であると捉えられている。<sup>(21)</sup>

大衆社会がこのような社会であると捉えられるとすれば、その社会の一般的な帰結は「社会参加の弱体化」、とりわけ「諸個人とエリートや社会構造との関係の希薄化」であろう。したがって大衆社会においては、当然、組織の大衆的性格がより一層問題にならざるをえない。

セルズニックは、その大衆組織の特徴を、断面的な参加動員の高さ、組織成員が構造化されていないが故の操作などによって特徴づけている。まず第一に、大衆的な組織においては、組織へのコミットメントは部分的である。

そこで大衆組織をつくるために、リーダーシップは組織成員を活性化しなければならぬ。第二に、大衆組織における参加は全パーソナリティで行うのではなくて、当面の状況でかれらが持っている役割にしたがっておこなわれるので、きわめて断片的にならざるをえない。第三に、大衆組織においては、統制エリートが「構造化されていない人々を行動に駆り立てる」という意味での動員がきわめて頻繁におこなわれる。そして第四に、組織のなかの大衆は、象徴的にも、組織的にも、数々の操作を受けやすくなり、組織の中においても大衆行動を行っていくのである。<sup>(22)</sup>

このように大衆社会においては、大衆が組織の外においても内においても大衆行動を行っていくとすれば、その大衆行動の特徴とそれが制度にたいして持っている意味を捉えておくことが重要になる。セルズニックはそれを次の四点に整理している。第一は、大衆行動は創造的な文化を維持するエリートの衰退を帰結するということである。第二は、大衆行動はステレオタイプ化された価値にたいする表面的な帰依を結果するということである。ステレオタイプ化された価値というのは、その価値の原

理をほとんど理解せず、かつまたそれを自らの行為に反映させもしないのに、その価値の象徴を特別に好みそれを攻撃的に擁護するような場合の価値である。すなわちそれは、正しく知的に伝えられていないわけで、それは結果として文化の貧困化をもたらすことになる。第三は、大衆行動はアクティビストの民主主義解釈(民主的な制度をスキップして、無媒介の直接的努力を重視する)と結びつき、かつまた社会的な対立を解決するための力に依拠するようになるということである。第四は、大衆行動は社会制度の価値を低め、制度の性格規定機能を貶めるといふことである。<sup>(23)</sup>

つづいてセルズニックは、大衆人は街頭や組織の中において見出されるだけではなくて、制度のリーダーシップを握る層にも見出すことができるかと主張する。彼らは制度のインテグリティを擁護する能力を欠いているので、その社会の重要な機関は政治的な攻撃にたいして無防備なままに放置されてしまう。セルズニックは、この文脈において、教育のある中間階級も決して例外でないことを強調している。世論を形成するに際して、指導的な役割を想定されている彼らが大衆化してしまおうとしたら、

民主主義の制度を守ることはできない。彼は教育のある中間階級にもかかわらず大衆化したものを「スターリノイド・リベラル」と呼んで、彼らに特別の関心を注いでいる。<sup>(24)</sup>

「スターリノイド」は、大雑把には党のシンパを意味する心理学的なカテゴリーであるが、セルズニックはその人の制度的な環境や機能とは切り離されることにし、党イデオロギーによって構成される「ような人間のことを指すためにこの概念を使用している。彼らに特徴的なことは、彼らの参加や党支持の質である。彼らの政治的な参加の主要な構成要素は、(1)積極的な信念というよりも、存在する価値からの疎外によって動機づけられた参加、(2)表面的で優柔不断なかかわりを結果する、理想や制度にたいする深く人間的な関わりの欠如、(3)ステレオタイプ化された政治的コードやシンボルに基づいた参加、(4)目的と手段を完全に分けてしまうことを含むリアルポリテイク、(5)政治的な行為における非合理性や心理的代償の追求、などに求められる。要するに「スターリノイド」というのは、彼らの生活する世界から自分自身を切り離すことをせず、未来を共産主義に託そ

うとする、疎外され、恐怖感に満ちた、孤独な人々のことである。<sup>(25)</sup>

結局のところセルズニックが「スターリノイド」に注意を喚起したのは、「政治的闘争という条件のもとにおいては、彼ら自身の確固とした価値をもたない者は、すっかりとした価値を持ったもの的手段となる」という<sup>(26)</sup>敵然とした一般的な法則が存在すると考えるからである。そこに操作が貫徹する基礎が求められている。

セルズニック自身も認めているように、以上のように考えるとすれば、「スターリノイド」はなにも共産主義だけに現れるのではない。なんら特定の政治的立場に限られることなく、あらゆる立場に現れる可能性をもっていると言える。実際にアメリカで起こったことは、共産主義の勢力の拡大といったことではなくて、反共主義の「スターリノイド」が重要な役割を果たし、反共主義が広まっていったということであろう。しかし、もしもセルズニックのいう一般的な法則が正しいとすれば、大衆社会状況においてレーニン主義党のスターリン主義化の可能性は完全には否定できないであろう。もちろん、一般的な法則は鉄則ではない。何らかの条件のもとで一般的

な法則は現実のものになる。したがって、どのような条件がある時、大衆社会状況においてレーニン主義党がスターリン主義化していくのかといった分析が不可欠のことになるのである。

## 6 ボランティアアソシエーションと権力

これまでの検討からも判るように、セルズニックの前衛党の研究は、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの党理論、党概念の異同を検討することなく、良く言えばそれらは連続したものとして、教義ならびに党を権力獲得のための手段とする度合いの少ない方からマルクス・エンゲルス、レーニン、スターリンがならぶといった形で理解され、悪く言えばすべての理論からそのつど都合の良い部分が適当に使われるという形でおこなわれてきたと考えられる。またボルシェビキ党は、いくらそれが党内民主主義を貫徹させる形で運営されたところで、ボランティアアソシエーションの原則を越えており、本質的に否定的、破壊的なものであるとも理解されていると考えられる。したがって、前衛党論としては、その科学的な要件を欠いていると批判されてもしかたが

ないであろう。セルズニックはボランティアアソシエーションの立場に立っている。もっとも彼は、大衆社会化状況においては、ボランティアアソシエーションの形骸化は深刻であり、したがってボランティアアソシエーションの権力的意味はミニマムであることも認めている。したがって彼としては、その形骸化をくいとめ、秩序の価値を制度を使って正しく伝達していくことに努力を傾注する以外に道はない。

本書においては、セルズニックはそれ以上のことは論及していない。したがって、ボランティアアソシエーションと権力の関係について、一般的な考察をしてセルズニックの立場の妥当性を検討することによって、本論文のしめくりにすることにしたい。

先にも若干言及したように、ボランティアアソシエーション研究の文脈においては、「ボランティアアソシエーションは、社会変動の強力なメカニズムを提供する」といった前提が置かれている場合が散見される。果たして、この前提は容認できるものであるのだろうか。これまで多くのボランティアアソシエーションの研究によれば、ボランティアアソシエーションへの参加率やどのよ

うなボランタリーアソシエーションに参加するかは、階級、性、年齢などによって大きく異なるという。例えば、都市の中間階級は他のどの階級・階層よりもボランタリーアソシエーションへの参加度が高く、しかも手段的なアソシエーションに参加する場合が多い。これに対して下層階級や労働者階級は、表出的なアソシエーションへの参加度は中間階級よりも高いが、全体的にはアソシエーションへの参加度はそれほど高いとはいえない。さらに、手段的なアソシエーションにおける活動は、労働者階級よりも下層階級のほうが活発におこなっているということも明らかにされている。これは、マイノリティや人種・民族集団の参加が活発であることの結果である。<sup>(27)</sup>

またこれまでのボランタリー・アソシエーション研究が、支配階級や上層階級のボランタリーアソシエーションについてあまり研究していないのは、大きな欠落ではないだろうか。むしろいくつかの支配階級研究が、National Civic Federation や Council on Foreign Relations や Committee for Economic Development などの研究をおこなっている。

それらの研究によれば、これらの支配階級を中心とし

たボランタリーアソシエーションは、裕福な支配階級の将来を見通せるリーダー達を結びつけ、保守的な労働組合をも巻き込みながら、彼らの利害を表明し、ありとあらゆる領域にわたって効率よく彼らの利害を実現しているのである。<sup>(28)</sup>

これにたいして、根本的な社会変動を志向する勢力によって構成されているボランタリーアソシエーションは、いかなるものであれ、国家権力の弾圧をうけたことがある。たとえば、一九一九年から一九二〇年にかけてのアメリカ社会党と I・W・W への弾圧は、一万人以上の人が逮捕され、この弾圧は後の F・B・I 長官のフーパーさえも憲法違反であると認めざるをえなかったほど反動的なものであった。<sup>(29)</sup> その結果、両組織ともいちぢるしく勢力を削がれることになってしまったのである。支配階級のボランタリーアソシエーションが、国家との関連においてきわめて効率的に自己の目的を達成していくのたいてい、後者のアソシエーションはこれまた国家との関連において、まったく対照的な軌跡を描かざるをえない。

以上要するに、ボランタリーアソシエーションも階級

構造、社会構造、国家の規定をうけており、一般的に、ポランタリーアソシエーションは社会変動の強力なメカニズムであることを前提にして、議論を進めることはできない。そのことは明らかであろう。ポランタリーアソシエーション研究は、こうした諸点を踏まえて再構成されるべきであろう。勿論、こう言ったからといって、ポランタリーアソシエーションの重要性を否定するつもりは筆者には毛頭ない。いや、ポランタリーアソシエーションは、ますます重要性を増しており、ポランタリーアソシエーションのネットワークキングによって、「能動的社会」<sup>(30)</sup>を構築していく方向は目指されるべき方向としてある。しかしなお、そうした方向性には、「労働者の分散、競争を克服し統一するなかで形成されていく」(田中清助)<sup>(31)</sup>資本主義胎内のもう一つの種類のアソシエーションへの筋道は見出せない。セルズニックの「ニューヨーク知識人」として歩み、セルズニック組織社会学の検討は、そのことをわれわれに教えてくれている。

## 7 おわりに

本稿は、ニューヨーク知識人の一人としてのセルズニ

ックの組織社会学の意味を最大限追求してみようと企図したものである。セルズニック社会学全体にわたる検討は、本論文では果たすことができなかった。またニューヨーク知識人全体の研究は、できるだけ早い機会に纏めて、読者の批判を仰ぎたく考えている。

(1) 拙稿「現代アメリカ思想と知識人の諸問題(上)(下)」『現代思想』二六号、二七号、「アメリカ社会学と現代思想」『現代思想』四卷一三号、「アメリカ知識人の社会史のためのノート」『社会労働研究』二六卷二号、「アメリカ一九三〇年代の社会運動と知識人の問題(上)(下)」『一橋論叢』九八巻一号、三号。

(2) Nathan Glazer, *The Social Basis of American Communism*, Harcourt Brace, 1961. Irving Howe and Lewis Coser, *The American Communist Party*, Praeger, 1957. Philip Selznick, *The Organizational Weapon*, The Rand Corp. 1952.

(3) 彼の政治的経歴に関しては、未だよく判っていない点が多い。研究の進展とともに修正され、正確なものにしていきたい。

(4) Philip Selznick, *The Organizational Weapon*, p. vii. ただし引用は一九七九年に公刊された Arno Press 版からおこなっている。

(5) *Ibid.*, p. 2.

- (9) Arnold Rose, *Theory and Method in the Social Sciences*, University of Minnesota Press, 1954, pp. 50—51.
- (10) Selznick, *op. cit.*, p. 17.
- (11) *Ibid.*, p. 21.
- (12) *Ibid.*, p. 25.
- (13) *Ibid.*, p. 28.
- (14) *Ibid.*, pp. 72—73.
- (15) *Ibid.*, p. 36—42.
- (16) *Ibid.*, p. 39.
- (17) *Ibid.*, pp. 82—83.
- (18) *Ibid.*, pp. 78—79.
- (19) *Ibid.*, p. 97—98.
- (20) *Ibid.*, pp. 8—9.
- (21) David Riesman, "A Personal Memoir: My Political Journey" Walter Powell and Richard Robbins (eds.) *Conflict and Consensus*, The Free Press, 1984, pp. 341—342.
- (22) 丹下 和雄 "Interview with Daniel Bell, May 1972" Job Dittberner, *The End of Ideology and American Social Thought: 1930—1960*, UMI Research Press, 1976, pp. 325—335.
- (23) Selznick, *op. cit.*, pp. 227—228.
- (24) *Ibid.*, pp. 281—285.
- (25) *Ibid.*, pp. 286—289.
- (26) *Ibid.*, pp. 292—295.
- (27) *Ibid.*, p. 297.
- (28) *Ibid.*, pp. 298—307.
- (29) *Ibid.*, p. 308.
- (30) 松本 浩一 博士を参照し、参照し、Nicholas Babchuk and Alan Booth, "Voluntary Association Membership: A Longitudinal Analysis" *American Sociological Review* 34, 1969. Alan Booth, Nicholas Babchuk and Alan Knox, "Social Stratification and Membership in Instrumental-Expressive Voluntary Associations" *Sociological Quarterly* 9, 1968. 松本 浩一 博士の論文は、この博士論文を参照せよ。David Sallach, "Voluntary Associations and Power: A Reassessment" (mimeo).
- (31) 支配階級のヒエラルキーの分析に於いて、財団を准政府機関、研究機関、各種の業界団体の分析を重視する。この分析は、拙著「日本の権威」を参照せよ。
- (32) Patrick Renshaw, *The Wobblies: The Story of Syndicalism in the United States*, Anchor, 1968, p. 121.
- (33) Amitai Etzioni, *The Active Society*, The Free Press, 1968.